
遺書～あなたへ～

橘結城

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遺書〜あなたへ〜

【Nコード】

N9785A

【作者名】

橘結城

【あらすじ】

ごく普通の主婦が、遺書を通して、遺書を書くまでの苦悩を「あなた」へ告白する。

あなたへ

これを最初に目にするのがあなたであってほしいと願います。

これを書いている段階で、私はまだどんな死に方をしようか、決めている訳ではありません。

死のうと決めたのはもうずっと前の事です。でも実行するのが恐かった。

死後の世界は私には、決してこの世よりも楽なものではないでしょう。

それがなぜなのかを今からお話します。でも、全てを書き、それを読んだ後にあなたがどうなるかを考えると、なかなか筆が先へと進めないのです。

あなた、これだけは分かってください。

私はこの瞬間、あなたを愛しています。

運命の強い波に押されたような結婚だと思っていましたが、それはこの瞬間、確信となりました。

あなたは常に私を想ってくれていました。なのに、私がその想いを信じるのが遅すぎたのです。今まであなたの何に疑いを抱いていたのか、自分で自分が分からない。

私のエゴで、あなたを加害者だと思い込もうとしていただけなのでしょう。私はそういう女なのです。

こんな私と結婚した事を一生後悔してください。私を心の底から恨んでください。

あなたの運命を狂わせてしまったのは、この私に他ならないのです。

後悔してもしきれない程の罪を、私は犯してしまった。この手紙を読み終えて全てが理解できるでしょう…。

- 1 - (後書き)

第2回も読んでもらえるよう執筆していきたいと思います。感想、お待ちしております。

二枚目の真新しい便箋を目の前にして、まだ躊躇している私がい
ます。

目をつぶると、悔しい事に、幸せだった思い出が私の筆の邪魔を
するのです。

死ぬのが惜しいではありません。

これも私の大罪なのです。

こんなにも幸せだった家庭に、私が毒を撒いたのです。

神など、何度いる訳がないと思っただ事でしょう。

私が、どれだけ懇願しても神は現れてはくれなかった。もちろん
助けても…。

でも、この瞬間神に祈りを捧げたい気持ちです。

私に変わってあなたに謝罪してくださいと。

私はこの世から逃げました。

大切なあなたと子供たちを置いて…。

一秒でも早く、この手紙を書き終えてあなたと子供たちから私の
存在を消さなければ、ますます私の罪は大きくなるのです。

でも、最後なんですもの…。後悔のないように書き尽くしたい。

全部話さなければ、あなたは私を忘れてくれないような気がします。

なぜ、人は変わるのでしょ…。変わらなければ私は、世間知らずなお嬢さんのままでいられたのに。

あなたは最後まで私をそう思っていましたね。

私はそれが切なくてならないのです…。

あなた、私の真実を聞いてください。

私は、あなたを誤解していたのです。
あなたには、他に好きな人がいると…。

結婚して一年が過ぎた頃、ポストに一枚のはがきが届いていました。

はがきには
「小林小百合」
と書いてありました。

私は、その名に聞き覚えがあつたのです。あなたの仕事仲間で、あなたから度々名前を聞いていたからです。

なぜ、小林さんが？と思ったでしょうね…。

そのはがきは小林さんからのはがきではありませんでした。

某ケーキ店からのはがきだったのです。

はがきにはこう書いてありました。

この度は、

「こばやしさゆり」

さんのケーキを購入して頂きまして誠にありがとうございます。

はがきを何度も読み直して、私へのケーキではない、と心の中でつぶやいていました。

はがきは、ゴミ箱の奥底へとすぐに捨てました。

何度考えても、あなたが他の女性に贈り物などする人ではない、その結論にたどり着くのです。

でもその一方で、あなたの行動を逐一チェックするようになったのです。

携帯電話、財布、車の中…。

もちろん、小林小百合との証拠ははがき以来何も出てくる事はありませんでした。

来る日も来る日も、決してのぞき見の証拠を残さないようチェックしている自分に、いつしか呆れ、大嫌いになっていたのです。

その頃の私は、目もつり上がり、肌に艶もなく、いつも濁った目をしていたような気がします。

この

「日課」

に終止符を打ちたい、いつもそう思っていました。

そして私は考えたのです。

「私も浮気してみよう」

と…。

その頃、出会い系サイトで遊んでいる友達がいました。

私は、彼女と会った時にその事を聞いてみたのです。

彼女は

「親しい友達が増えるだけ。」
と言いました。

話の流れで、そのサイトを紹介してもらいましたが、投稿すると返信できないくらいのメールが来る、と聞いていたので自分で投稿するのはすごく躊躇われました。

結局、彼女からたくさんいるメル友のうちの一人を紹介してもらう事にしました。

- 3 - (後書き)

まだまだ序盤ですが、ぜひ、感想をお寄せください。

あなた、ごめんなさい。

私は、彼女から紹介してもらった男性と浮気しました。

本当に

「浮気」

という言葉以上の何ものでもない、馬鹿げた行為でした。

向こうは、お金と時間があるから私と会い、私はあなたへの復習だと思って会っていたのです。

顔も声さえもぼんやりとしか思い出す事はできません。

本当です。

お互い、相手が誰だろうと関係なかったのです。

秘密さえ守ってくれば…。

あなた…。

私のした事はそれだけではありません。

私は会う度に2万円を受け取っていたのです。

当時、私たち家族の生活費はいつも赤字で、夕飯の材料は一日500円以内と決めていたくらいです。

本当は何か贅沢な食材でも買えば良かったのかもしれませんが、その、汚れたお金を家族のための生活費に使う事はどうしてもできませんでした。

ある日、相手から、

「あげたお金は何に使っているの？」

と、聞かれました。

私は、

「特別何にも。」

と、答えました。

「お金に余裕があるならパチンコ行ってみようか。」

相手にそう持ち掛けられ、生まれて初めて私はパチンコ店に行ったのです。

初めは、相手の暇つぶしに付き合う形でついて行っていました。

大勝ちする位まで居座る訳でもないただの暇つぶし…。

それが、どんどん勝つ金額が大きくなるほど深みにハマっていったのです。

気付くと浮気相手とは関係がすっかり終わっていました。

その代わりにギャンブルへのめり込んでいったのです…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9785a/>

遺書～あなたへ～

2011年10月3日15時10分発行